

達成度（評価）
A：十分達成できている
B：おおむね達成できている
C：やや不十分である
D：不十分である

学校名	唐津市立佐志小学校
1 前年度 評価結果の概要	・校内研究を算数科に変更し、伝え合う活動を通して、自分の考えを深めることができる算数科の指導方法の工夫を行ってきた。研究の途中で、十分な成果は出せていないが、研究内容を焦点化し、特に伝える力を高める算数科の学力向上を目指し、研究を進めていく。 ・「自分も他者も大切にする児童の育成」を目指し、人権・同和教育を中心に据えて心の教育を行っていく。 ・外部講師を招聘したり、地域の人材を活用したりして、連携を図り児童の豊かな学びにつなげていく。
2 学校教育目標	「自分も他者も大切にするさっし子の育成」 ～自ら「気づき、考え、実行する」子供～
3 本年度の重点目標	○子どもの心を豊かにする・・・善悪を考えた行動を心がけ、集団の一員として協力・協調できる態度の育成をめざす。 ○子どもに学力をつける・・・基礎的・基本的な学習・生活習慣の定着を図り、思考力・表現力の向上をめざす。 ○家庭・地域との連携を図る・・・保護者に寄り添い、地域とともに子どもを育む学校をめざす。

4 重点取組内容・成果指標				5 最終評価		主な担当者
(1)共通評価項目						
重点取組			具体的取組	最終評価		
評価項目	取組内容	成果指標 (数値目標)		達成度 (評価)	実施結果	
●学力の向上	○学習習慣及び基礎基本の定着	○始業時間に席に着き、学習の準備ができている児童80%以上。 ○期末テストの漢字、計算テストにおいて、クラス平均70%以上を目標とする。 ○「話し合い活動のよさを感じる」と回答した児童70%以上。		B	・全校で2分前行動に取り組んだ。休み時間の初めに次の準備を済ませている児童は増えてきたが、チャイムと同時に席に着く児童も2割程度いる。 ・期末テストの漢字、計算においてクラス平均70%以上を全クラス達成した。 ・12月の算数アンケートで「話し合い活動のよさを感じる」と回答した児童は95%だった。算数を中心に、話し合い活動を充実させ、児童の学習の理解を深めることができた。	まなび部
●心の教育	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○アンケート結果から、自分や友だちの良さや、違いを認めるよさを回答をした児童が80%以上。	・人権・同和教育の視点で授業を行う。人権の日集会、「ありがたうの木・かがやきの木」などを計画的に実践し、自他を大切にする心情を育む。 ・道徳では、話し合いなどを通して自分事として捉えられるような授業実践を行う。	B	・「ありがたうの木・かがやきの木」の放送と掲示を継続的に行ったこと、各クラスの取組もあって自分や友だちの良さを見つけようという気持ちが育った。 ・全学年で必須教材に取り組み、子どもたちが自分の言動を振り返る展開を取り入れることで自他を尊重する気持ちが育った。	人権・同和教育担当 道徳教育推進教員
	●いじめの早期発見、早期対応に向けた取組の充実	○いじめ防止等(いじめの定義、いじめの防止等のための取組、事案対処等)について組織的対応ができていると回答した教員80%以上。 ○アンケートで「学校に行くことが楽しい」と回答する児童が80%以上。	・月ごとの「心のアンケート」等で、児童の実態を把握し、それを受けて「子ども理解研」を実施し、組織的対応を図る。 ・事案発生時には、「いじめ防止対策委員会」を開き、組織的に早急に対応する。	A	・アンケートより、学校生活を楽しんでいる児童が90%以上いる1年間であった。朝のあいさつや表情も良く、学校生活に大きな問題を抱えている児童は減っていると考えられる。 ・月に一度の「子ども理解研」が実のあるものになるように話し合いの時間を多く取ったこと、こまめなケース会議を行うことで、情報交換をしながら対策をとることができ、大きな問題にはおこらなかった。	教育相談
	●児童が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動。	●「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した児童80%以上 ●「将来の夢や目標を持っている」について肯定的な回答をした児童80%以上	・「ほめるから、はじめる。はじまる。」を合言葉に、学校のあらゆる活動の中で児童に対して職員が積極的に肯定的な言葉かけをし、主体性を引き出す。 ・児童がさまざまな「人・こと・もの」と関わり、学びを深め、自己実現していくような道徳学習や体験活動の場を設定する。	B	・「ほめるから、はじめる。はじまる。」の取組が、児童間にも広がった。特に、委員会活動からスタートした「ありがたうの木」「かがやきの木」「ありがたうの花束」の取組を通して、全校児童同士が、互いに肯定的な言葉をかけ合うことができ、人間関係の中で深まりがみられた。 ・地域の方々をはじめ、外部機関からの講師の方々を交えた体験的な活動を通して、児童はこれからの学びや生き方を考える契機となった。今後は、児童のさまざまな意欲が「実行」へとつながるよう深化・補充した取組の工夫が必要である。	教務
	○集団における受容的、寛容的な態度の育成	○縦割り班活動後の振り返りで、活動に対して肯定的な回答をした児童が80パーセント以上を目指す。 ○Q-Uにおける満足群の割合を昨年度以上とする。	・自分も他者も認めるために「たてわり伝言板」を活用・放送し、校内に知らせる。 ・児童相互のトラブルに対し全職員が丁寧な関わりや対応を行う。 ・仲間づくりを中心に、支持的風土のあるクラスづくりをする。	A	・今年度は集まる回数が昨年と比べて増えたこともあり、「縦割り遊びが大好き」と答えた児童が85%以上と、肯定的な回答を得ることができ、異学年の交流が増えた。 ・全校での活動後、「ありがたうの木・かがやきの木」へのメッセージを活動の振り返りとして活用でき、児童の自己肯定感が高まった。 ・引き続き児童相互のトラブルに対しては、職員連絡会や子ども理解研などで、全職員で共有し、どのように関わるのかを話し合って対応した。次年度も継続し、児童に寄り添っていきたい。	なかま部(特活)
●健康・体づくり	●「運動習慣の改善や定着化」 ●望ましい生活習慣の形成	●授業以外で運動やスポーツを行う時間が1週間で420分以上の児童60%以上 ●早寝・早起き・朝ごはんを推奨し、家庭へ啓発する。生活アンケート等による児童・保護者の達成率80%以上。	・体育委員会の活動を軸として、各学級のボール等の整備を行い、外遊びを推進する。 ・各学級が「スポーツチャレンジ」へ積極的に参加できるような取り組みを進める。 ・なわとびタイム、マラソンタイムを年間計画に位置づけ、実施する。 ・通信やホームページなどで保護者に向けて積極的な啓発を行う。 ・児童期の身体の発達にとって睡眠や朝食の大切さ等を段階的に指導する。	A	・授業以外で運動やスポーツを行う時間が1週間で420分以上の児童が64%であった。 ・体育委員会が全校へ働きかけ、全ての学級がスポーツチャレンジに参加した。 ・なわとびタイム、マラソンタイムを実施し、全校児童が積極的に運動を楽しむことができた。 ・生活満点1週間の取り組みで、「早寝・早起き・朝ごはんを心がけている」児童が80%以上を達成できた。	くらし部 まなび部
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。	・定時退勤日を設定する。 ・教材の共有や役割分担、行事の見直しを行い、教職員の負担を軽減する。 ・会議等の終了時間を設定し、時間内で終わるよう提案方法を見直す。 ・タイムマネジメントを意識した働き方を呼びかける。 ・「はたらきたか！改革」のために、職員間の風通しを良くし、何でも言い合える人間関係づくりを行う。 ・消耗品や教材の収納を「見える化」することで、物を探す時間を減らし、業務効率化につなげる。	B	・教材教具の資料をデータ化することで、年度当初などの学級事務作業が効率的になった。また、準備等が勤務時間内できるように行事の見直しを図り、負担軽減につながっている。職員の時間外在校時間が24.7時間となり、中間期よりも17%減少している。しかし、土日出勤をする職員も数人いて、引き続きライフワークバランスを考えた働き方を心がけるよう声をかけていく必要がある。 ・消耗品や教材の整理整頓やラベル等を定期的に行ったり、ラベル等を貼付したりすることで、物品の所在が明らかになり、物を探す時間の短縮につながった。今後は、教材室(資料室)等の整理整頓もできるだけ行っていきたい。	教頭・事務長
●特別支援教育の充実	○特別支援教育に関する教員の専門性と意識の向上	○特別支援教育に関する専門性や意識が向上したと回答する教員が80%以上。	・研修や授業参観等で、特別支援級に入級している児童の実態を把握する。 ・インクルーシブ教育の考え方に基づいた児童理解と支援についての見識を深める。 ・個別的教育支援計画・指導計画「子ども理解研」の資料を活用し、個に応じた対応を図るようにする。	A	・授業参観の時間を多く設け、支援級の児童の実態を、全職員に把握してもらうことができた。 ・インクルーシブ教育の考え方に基づいた支援ができるよう、児童理解研や特別支援の研修を行い、全職員で見識を深めることができた。 ・個に応じた対応ができるように、支援会議・ケース会議をこまめに開き、学校全体として対応することができた。	特別支援CO 特別支援担当
(2)本年度重点的に取り組む独自評価項目						
重点取組			具体的取組	最終評価		主な担当者
評価項目	重点取組内容	成果指標 (数値目標)		達成度 (評価)	実施結果	
○地域との連携	○◎地域素材や人材を活用した授業の推進	○外部講師を迎えての授業・体験学習を各学年、年間2つ以上実施する。 ◎地域の良さを知り、地域が好きになった児童が80%以上。 ◎自分のこれからに生かそうとしている児童が80%以上。	・「いきいきまなぶからつっ子」の事業を活用し、様々な外部と連携を図り、体験活動を行う。 ・地域の人材の活用や、地域を知る学習を通して、ふるさとに誇りをもち、自分の将来につなげられるようなキャリア教育を行う。	B	・県の事業や「いきいきまなぶからつっ子」の事業を活用しながら、外部講師を招き体験活動を行った。特に5年生の海洋教育では、学校・地域・市・企業と連携しての活動が良いモデルとなっている。 ・体験活動を通して、児童は地域のことを誇りに思うことができている。(振り返り、アンケート等で80%以上が回答) ・開かれた学校づくりの意識は高まってきているものの、地域の人的資源・物的資源の新たな掘り起こしが課題である。	教頭・教務
●・・・県共通 ○・・・学校独自 ◎・・・志を高める教育						
5 総合評価・次年度への展望						
・道徳をはじめ、すべての教科において人権・同和教育の視点を持ち、心の教育を行い、善悪の判断ができる児童の育成を行う。 ・自分の思いや考えを表現できる算数科指導方法の工夫を行ってきたが、力がついてきた部分とまだ十分でないところがあるので、引き続き研究を行い学力の向上を目指す。 ・地域に開かれた学校、教育課程を目指し、実践を行ってきた。徐々に成果が表れてきたので、引き続き連携を行っていく。						